様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１８８０

研究課題名（和文）米国のブラック・ナショナリズムに関する実証的研究―シビック・ナショナリズムと人種

研究課題名（英文）Histrocial Inquiry of U.S. Black Nationalism: Civil Natinalism and Race

研究代表者
藤永　康政（FUJINAGA, Yasumasa）

日本女子大学・文学部・准教授

研究者番号：２０３１４７８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「ブラック・ナショナリズム」の展開を歴史実証的に検討することで、一般にシビック・ナショナリズム型国家の典型とされるアメリカ合衆国の社会統合において人種がもつ意義を明らかにすることを目的としたものである。
また、2014年に起きたファーガソンでの「暴動」、ならびに2016年のドナルド・トランプの大統領当選は、同国における人種を再考する機会となり、この時事的な関心も研究の射程に加え、その論考は、一般誌・学術誌双方で発表した。その最大の成果は、『思想』（岩波書店）所収の「黒人ラディカリズムの「68年」とブラックパワー」にて、直接本研究の課題と結びつけるかたちで展開している。

研究成果の概要（英文）：This research project, through archival documents investigation and oral history interviews relating to "Black Nationalism," illuminates how race works in the United States, putatively an epitome of the civil nationalism. For this project, Ferguson "riot" of 2014 and the rising popularity of Donald Trump after 2016 provided a superb opportunity to delve into race in contemporary America. Accordingly, I published a few articles not only for academics but also general public, in which I explicated the (historical) meaning of race during the Obama's America. These works gave a new perspective to this study along the way, and the article "1968 for Black Radicalism and Black Power," published in Iwanami Shoten's Shiso, is one of the main works achieved in this total project.

研究分野：アメリカ研究

キーワード：人種　黒人　ナショナリズム　ブラックパワー　公民権運動　労働運動　人種主義

１．研究開始当初の背景

(1)本研究は、2012 年度～2014 年度の基盤研究(C)「ポスト公民権時代の米国の北・中西部都市における人種関係の変容に関する地域研究」（研究代表：藤永康政）の研究成果を背景に計画されたものである。「ブラック・ナショナリズム」やブラックパワー運動は、しばしば 20 世紀後半のアメリカの人種間対立の根源とされている。この研究においても、確かにそのような現象は確認されたのであるが、その歴史的な形成過程の分析ついては、「60 年代以後の黒人の急進化の開始は、リベラリズムに吸引された形での「運動の狭隘化」に抗うという性格を強く有するものである」という仮説の妥当性を検証するという不十分なものに留まってしまった。ここが本研究の出発点である。

（2）上述の基盤研究(C)は都市での運動の展開に焦点を強く絞り込んだものであった。本研究は、これまでの研究成果をアメリカにおける「リベラリズム」の変容過程のなかで考察するというマクロな次元へ考察の焦点を移したものである。

(3)また、わが国において、ブラック・ナショナリズムやブラックパワー運動に関する本格的な学術研究は極めて少ない。本研究は、今後の同種の研究の礎ともなる学術書研究に向けた調査を行うべく計画された。

２．研究の目的

(1)本研究は、20 世紀後半の黒人の急進的な政治運動をアメリカン・リベラリズムとの関係性のなかで解明することを目的としたものである。シビック・ナショナリズム型国民形成の典型とされるアメリカ合衆国の社会統合過程のなかで人種がもつ意義を明らかにすることを大きな目的として実施され、ブラック・ナショナリズムが活力を得ていく 1960 年代、この運動の拠点となったニューヨーク、デトロイト、サンフランシスコに実証的な検討の焦点をあわせて、その解明を目指した。

(2)検討にあたっての具体的な考察課題としたのは、①黒人都市コミュニティ形成と人種意識の変容、②左翼・学生運動との相互浸透過程、③アジア・アフリカの新興国ナショナリズムとブラック・ナショナリズムの関係である。

３．研究の方法

(1)本研究は、①ニューヨーク、サンフランシスコ／オークランドでの文書館リサーチ、②2001 年度～2014 年度奨励研究(A)「1960 年代後半の米国における人種意識の構築と「ブラックパワー運動」」（研究代表：藤永康政）、2007 年度～2010 年度基盤研究(A)「1960 年代の米国における文化変容とその越境に関する総合研究」（研究代表：油井大三郎）で行ってきたオーラル・ヒストリー・インタビューの継続的実施、③購入済みマイクロフィルム史料の検討を主軸として実施され、その方法論的は具体的なプロセスを史料に基づいて考察する史学実証的なものである。

(2)研究計画初年度にあたる 2015 年度には、ウィスコンシン州歴史協会所蔵のロバート・F・ウィリアムスに関する史料を入手し、その検討に着手するとともに、購入済みマイクロフィルムを利用した検討も始めた。

(3)2016 年度には、ニューヨーク市立図書館ショーンバーグセンター所蔵のマルコムＸ文書の分析を開始した。

(4)また同年度にはブラック・パンサー党結党 50 周年大会に参加し、いくつかの聞き取り調査を実施した。

(5)本研究の実施期間はまた、ミズーリ州ファーガソンでの黒人青年射殺事件（2014 年）やその後のブラック・ライヴス・マター運動の興隆、大統領選挙でのドナルド・トランプの人気の沸騰やその後の「白人至上主義」の再興など、アメリカでの「人種問題」に社会の関心が強く集まり始めた時期でもある。本研究は、この時事的な関心も研究の射程に加えることにした。というのも、バラク・オバマという存在は、ある意味、アメリカのシビック・ナショナリズム的な統合の象徴的な存在であり、「オバマの時代」を経過してもなお高まる人種間対立の意味の解明は、本研究の目的とも強く関連していると判断したからである。

(6)計画最終年度にあたる 2017 年度は、年度の前半を史料精査と論文執筆にあて、後半に総合的なリサーチをニューヨーク市立図書館ションバーグセンターで行った。また、デトロイトで行う予定にしていた文書リサーチは、関連のマイクロフィルムを購入することにし、この年度にその検討を始めた。

(7)また本研究の期間中、毎年春に開催される Organization of American Historian の年次大会（2015 年ミズーリ州ファーガソン、2016 年ロードアイランド州プロヴィデンス、2017 年ルイジアナ州セントルイス）に参加し、最新の研究動向を学ぶとともに、関心を同じくする研究者たちとの面談を通じて、国内外のアメリカ史学界のなかでの本研究の位置を確認した。

４．研究成果

(1)時事的な関心を取り込んだ本研究の成果は、もっぱら研究者を読者層とする学術的な媒体（『アメリカ史研究』『歴史評論』『日本女子大學紀要文学部』）だけでなく、一般読者に広く読まれている紙誌（『朝日新聞』での紙面インタビュー「（耕論）蝶と風と、壁と」2016 年 12 月 23 日、『現代思想』『世界』『思想』にそれぞれ所収の拙稿、『世界』2017 年 11 月号での中村寛氏との対談「「〈周縁〉の「小さなアメリカ」―変わりゆく黒人たちの〈抵抗〉藤永康政との対話」）にも発表する機会を得ることができた。これらの成果は、もちろん相互に関連のあるものであるが、以

下、基本的には年度別に時系列に沿ってその詳細を記す。
(2)計画初年度にウィスコンシン州歴史協会で入手したロバート・F・ウィリアムスのオーラル・ヒストリーは、トランスクリプトにして 1200 頁に及ぶ大部のものであった。それは、これまで藤永が先行研究の注記から推測していたものを大きく超えるものであり、これをもとに、アメリカ合衆国での文書史料リサーチの次年度以後への延期など、その後の研究の計画も変更することになった。史料の精査に関わる時間もかなり必要となるものであったが、2018 年 3 月刊行の『日本女子大學紀要文学部』所収の論文「第二次世界大戦時のデトロイトと公民権ユニオニズムの興隆」にて、その考察の一部を発表しており、現在もこのリサーチに基づいた研究を執筆中である。
(3)またこの前年に起きたミズーリ州ファーガソンでの黒人青年射殺事件に伴い、アメリカのみならず日本でも、「人種問題」に大きな関心が集まり始めた。藤永は、これを 21 世紀のシビック・ナショナリズムが孕む問題のひとつと考えた。このような関心と研究の進捗状況のなかで発表した『アメリカ史研究』に発表した論文「ファーガソンの騒乱――監獄社会と 21 世紀の人種主義」では、21 世紀の人種主義の背景に、1960 年代以後に現れた現象「黒人の大量投獄」が強く関わっているということを論証した。これは、シビック・ナショナリズムにおける「市民」の定義、その包摂と排除の再編に関わる問題を孕み、理論的な枠組みにおいて本研究の当初の問題関心と強く関係したものである。ここで整理した問題や結論は、計画最終年度に一般誌『世界』に発表する論考で、本研究で実施したオーラル・ヒストリー・インタビューを活かすかたちで発展的に引き継がれている。
(4)2016 年度は、藤永の所属機関の変更に伴い、研究計画の大幅な編み変えを必要とする年度となり、本研究に従事できる時間の確保が難しく感じた年度でもあった。その間にあっても、ニューヨーク市立図書館ショーンバーグセンターでのリサーチやブラック・パンサー党 50 周年記念集会でのオーラル・ヒストリー・インタビュー調査に予定通り従事しつつ、その内容の一部を研究会で報告をすることで、研究の進捗状況の検証にあたった。、さらにまた、この年度においては、ドナルド・トランプの人気の高まりに伴い、アメリカの「人種問題」にさらなる関心が集まり、わが国においても黒人の新しい社会政治運動、ブラック・ライブズ・マター運動が頻繁に報道され、テレビ放送で大型特集番組が放送され始めた時期に当たる。本研究に基づく藤永の考察によると、BLM は、1960 年代後半の黒人急進主義の影響を強く受けたものに映り、本研究との関連のうえでこの BLM の考察を開始することにした。この考察は、2016 年度の『歴史評論』所収の論文「オバマの時代――ポスト人種の功罪とトランプ政権の誕生」、ならびに 2018 年 5 月『世界』所収の「刑罰国家とブラック・ライヴズ・マター運動」で展開している。
(5)同年度内に公刊した研究成果には、トランプ台頭を歴史学的視点から考察し、『現代思想』に発表した「アメリカ例外主義の終焉と黒人のまなざし」がある。アメリカがシビック・ナショナリズム型国家の典型であるという見解は、アメリカは例外的な国家であると捉える、ひとつの系論を生む。ドナルド・トランプが語る「アメリカ・ファースト」は、しかし、レイシャルな排除を全面に出し、この例外主義的なナショナリズムとの断絶を意味する。それを、黒人の歴史的な経験の側面から検討したのがこの論文である。
(6)最終年度の業績である『日本女子大學紀要文学部』『思想』（岩波書店）で発表した二つの論文は、本研究の成果であるとともに、今後公刊する予定の研究書での序と結の部分をそれぞれ成すものである。このうち前者、「第二次世界大戦時のデトロイトと公民権ユニオニズムの興隆」は、デトロイトでの実証研究からなる成果であり、60 年代論である本研究の、いわば序をなす。60 年代論を展開するにあたって第２次世界大戦期の論文を敢えて執筆したのは、近年のアメリカでの公民権運動研究の主たる議論である「冷戦公民権」論を、わが国において初めて詳細に説明するためである。本研究において、シビック・ナショナリズムは冷戦的思考とも重なりあっていたということがより明確にわかってきた。これを論じるためには、冷戦公民権論を紹介することがまずもって必要であり、本研究での実証的な調査はこの議論にも活かせるがゆえに、単なる先行研究や議論の紹介に留まらない実証論文を執筆・発表することにした。
また後者では、リベラルな西洋普遍主義（シビック・ナショナリズムはその一部である）の排他性を暴いた 60 年代のブラックパワー運動の歴史的な意義を「冷戦公民権的な運動からの急速で激しい離脱」にあると結論している。現在は、この第二次世界大戦後のアメリカ社会と 60 年代後半のそれのあいだにある変化をまとめることに従事しており、それはひとつの個別の成果として将来世に問う予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）
①<u>藤永康政</u>「黒人ラディカリズムの「68 年」とブラックパワー運動」『思想』第 1129 号、査読無、2018 年 5 月、pp.46-66
②<u>藤永康政</u>「刑罰国家とブラック・ライヴズ・マター運動」『世界』、査読無、No.908、2018 年 5 月、pp.162-168

③藤永康政「第二次世界大戦時のデトロイトと公民権ユニオニズムの興隆」『日本女子大學紀要文学部』、査読無、第 67 号、2018 年 3 月、pp.115-133
④藤永康政「オバマの時代――ポスト人種の功罪とトランプ政権の誕生」『歴史評論』、査読有、第 811 号、2017 年 11 月、86-95
⑤藤永康政「モハメド・アリの生涯とその「遺産」」『立教アメリカン・スタディーズ』、査読無、第 39 号、2017 年 3 月、122-141https://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IAS/ras/39/fujinaga.pdf
jairo.nii.ac.jp/0468/00002643
⑥藤永康政「アメリカ例外主義の終焉と黒人のまなざし」『現代思想』、査読無、第 45-1 号、2017 年 1 月、pp.152-158
⑦藤永康政「ファーガソンの騒乱――監獄社会と 21 世紀の人種主義」『アメリカ史研究』、査読有、第 38 号、2015 年 8 月、pp.93-102

〔学会発表〕（計 2 件）
①藤永康政「20 世紀アメリカ黒人ゲトーの形成と再編−−−デトロイトとシカゴの事例からフォーディズムと新自由主義に関わって」、2016 年 10 月 8 日、学習院大学（東京都文京区）
②藤永康政「モハメド・アリと生涯とその遺産――ブラックパワー運動との関連で」立教大学アメリカ社会とポピュラーカルチャー研究会、2016 年 11 月 26 日、立教大学（東京都豊島区）

６．研究組織
(1)研究代表者
藤永康政（FUJINAGA, Yasumasa）
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20314784